

Incidence of endophthalmitis after intravitreal injection of an anti-VEGF agent with or without topical antibiotics

Morioka M, Takamura Y, Nagai K, Yoshida S, Mori J, Takeuchi M, Sawada T, Sone K, Fukuyama H, Kusuhara S, Yasukawa T, Murakami T, Tabuchi H, Nagasato D, Hirano T, Ueda T, Jujo T, Sasajima H, Mitamura Y, Ishikawa K, Inatani M. *Sci Rep.* 2020 10(1):22122. doi: 10.1038/s41598-020-79377-w.

抗 VEGF 薬の硝子体内注射は網膜疾患の治療として一般化した。比較的安全に行える治療であるが、ごく稀に細菌による感染性眼内炎をきたし得る。その予防のため、日本では抗菌点眼薬の予防投与が行われることが多いが、海外の報告によると感染性眼内炎を予防するエビデンスは乏しい。

そこで本研究では、国内 18 施設から合計 147,440 件の硝子体内注射症例を集め、感染性眼内炎発生率を抗菌点眼薬の使用方法別に比較した。その結果、感染性眼内炎発生率は抗菌点眼薬を使用しなかった群 (19,738 件) で 0.005%、注射前のみ使用した群 (10,903 件) で 0.009%、注射後のみ使用した群 (33,433 件) で 0.012%、注射前後とも使用した群 (83,366 件) で 0.005%であった。眼内炎発生率に統計学的有意差は認められなかった(chi-square test, $p = 0.57$)。また、疾患別の眼内炎発生率にも有意差は認められなかった(chi-square test, $p = 0.30$)。

投与された薬剤別にみると、ラニビズマブが投与された群では眼内炎症例は無く、アフリベルセプトが投与された群で 10 件の感染性眼内炎が発生した。以上の結果より、海外からの報告と同様に、日本においても抗菌点眼薬の感染性眼内炎予防効果は認められなかったといえる。漫然とした抗菌点眼薬の使用はベネフィットに欠けるだけでなく、薬剤耐性菌を生み出すリスクさえある。習慣化している抗菌点眼薬の予防投与を見直す必要があるかもしれない。